キャラクター名
左京　晴彦

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン ノイマン	ワークス	研究者	カヴァー	図書館司書
オプショナル		年齢	32歳	性別	男
覚醒	犠牲	衝動	解放	初期侵食率	34 %
出自	平凡	経験	宗教	邂逅	都築京香

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	0	1			1
感覚	0	0	1			1
精神	6	1	0			7
社会	2	0	0			2

HP	29
行動値	9
(非装備時)	9
戦闘移動	14
全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉		
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：知識：医学	4		情報：学問	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
古代種	P	N		
母親	P　同情	N 無関心		
城嶋　穂美	P　感服	N　脅威		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　6	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
戦術	4	6	セットアップ	視界	シーン	自動	ー	
効果：	対象のダイス＋Ｌｖ							
常勝の天才	7	6	セットアップ	視界	シーン	自動	ピュア	
効果：	攻撃力＋Lv×4．自分を対象にできない。1シーン1回。							
アドヴァイス	1	4	メジャー	視界	単体	自動	-	
効果：	対象の次のメジャーのC値-1、ダイス＋Lv個。							
インタラプト	1	8	オート	視界	単体	自動	ピュア	
効果：	対象の判定のC値＋1。1シナリオLv回。							
生き字引	1	1	メジャー	至近	自身	ー	-	
効果：	全ての《情報：》の代わりに使用可能。情報収集判定ダイス＋Lv。							
デジャヴュ	1	2	メジャー	至近	自身	自動	Dロイス	
効果：	GMに質問できる。1シナリオ1回。							
写真記憶	1							
効果：	書物の内容や景色は一度見たら忘れない。							
プロファイリング	1							
効果：	伝え聞いた情報から人物像を的確に想像できる。							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

A県S市の図書館で図書館司書をしている男性。
28歳でT大の博士課程を修了したが、研究者の道には進まず図書館司書になった。
記憶力・洞察力・先読みの能力が極めて高く、ノイマン発症者の中でも特に頭脳労働向きの性質を持っている。
幼いころの体験（トラウマかもしれない）が原因で宗教・民俗学・心理学などに興味を持っており、医学の知識も多少ある。
本来なら飛び級で博士をとれるほど優秀なはずだが、学生の特権をフル活用するためにあえて普通に卒業したようである。
性格は意外とアグレッシブで多少気難しいが、それは他人の過去を興味本位でほじくろうとするような少々デリカシーなさげな奴に対してのみである。
故にマスコミや近所のおばちゃん、探偵などには少々当たりが強い。
それ以外の人物に対しては普通に接する。物腰柔らかめの文系インテリに見えるかもしれない。イメージは京極堂と右京さんを足して2で割ったかんじ。
UGNには協力的ではあるが、本業（図書館司書の仕事や自身の研究など）がおろそかにならない範囲内での話である。
当初はコードネームをつけられていたが、気に食わなかったので断っている。以来いろいろあって、UGN関係者は彼のことを屋号で呼ぶようにしている。
図書館司書の業務の傍ら、ある宗教団体についての研究を進めている。

・左京晴彦の過去
子供時代の家庭環境は父がいないなどの問題はあれど、そこそこ一般的な家庭ではあった。
母子家庭で母は夜遅くまで働き、家に帰ると冷や飯が待っているような毎日。
たびたび夜中に母のすすり泣く声が聞こえ、それを見てしまうと「ごめんね・・・ごめんね・・・」といいながら無理に笑おうとする母と二人暮らし。
そんな日々をすごしていると、ある日、家の中でちょっとした変化がおきた。
――――家の一角に小さな神棚が据え付けられている。
さらに何か月か後、母は見知らぬ女たちを家に呼び込み、神棚の前で念仏ともなんともつかない言葉を延々と唱え続ける。
なんだか異様な雰囲気を感じ取り始めたのはこのころからだった。
そして少し後、晴彦は母につれられて、大きな屋敷のようなところにつれていかれた。
そこでは、数珠のようなものを手にして泣きながら正座する女が一人、そしてその周りを、白装束に仮面をかぶった人型のなにかがうねりながら囲んでいる。